

Cosmic Repeat Proverbs #1



cosmic
repeat
proverbs

Cosmic Repeat Proverbs #1

地球という惑星は、とても複雑で奇妙だ。私たちの知る有機的な生命が存在できるハビタブルゾーンに、水という完璧な媒介が過激な流動を繰り返す中で、細胞が生まれ、植物が生まれ、動物が生まれ、人類が生まれ、文明が生まれ、そして今、私はタイプライターで文章を打っている。混沌とした世界から対称性を理解する“機構”が作られたのだから、それを“奇跡”と呼ぶのも無理はない。しかし、本当に・・・奇跡なのだろうか？

46億年前に地球が生まれ、40億年前に生物が生まれ、5億年前から植物や動物は陸上へ進出した。そこからは指数関数的な増加で、700万年前に猿が二足で歩くようになり、150万年前に火を自在に操るようになり、知恵を手に入れた人類は10万年前から劇的な進化を遂げた、が・・・奇妙だ。1万年前に農業へ辿り着いたと云われている。それを基に線を描くと——何故か、歪なグラフになってしまうのだ。

その間は本当に何の発明もなかったのか？ 古来から未確認飛行物体が世界各地で観測されるのは何故？ 月面に着陸したアポロは司令塔との通信を遮断した際に何をした？ コラ半島で行われた地球の地殻深部調査が中止になった本当の理由は？・・・陰謀論に振り回されては、答えは見つからない。今の人類は、変わらず“科学”という最も優れた手段で文明を支えている。

少しだけ話題を変えよう。皆は“カウンタース”をご存じだろうか？ 太陽を公転する地球の軌道上に存在すると仮定された、地球と同様の惑星である。常に太陽の裏側に隠れている存在なので長らく真偽は不明だったが、物理学を発達させた人類は方程式を用いて地球が唯一の惑星であることを証明した。・・・本当に存在しないのか？ 本当に——存在“しなかった”のか？

今の人類が己を認知する前、太陽系には2つのハビタブル惑星が存在した。

一つは、私たちが暮らす自然に富んだ惑星。月の満ち引きで生命が混ざり合い、多様な共存関係が構築された——古の人類はここを《フォルタグルンドゥ》と呼んだ。

一つは、海水と雨雲に包まれた群青の惑星。僅かな陸地に生命が芽生えることはなく、しかし人類が開拓した——そこは《ティロディアクボ》と呼ばれていた。

今の人類が知る由もない、壮大で複雑な歴史が存在する。2つの地球には、科学を扱う人類と魔法を持つ人類が存在した。環境に依存する言語を用いて高度な歴史を語り継ぐことは難しい。しかし、宇宙の様々な事象を共通の言葉で綴ることができる今、私はタイプライターで物語を記すことにした。これは、永久の命で空白の10万年を生き続けた私が発信できる、唯一の警告かもしれない。この歴史は——嘗ての諺にも綴られている。

【真実を知覚しない人類は、同じ歩みと過ちを繰り返す。】

Cosmic Repeat Proverbs #1

この物語はフィクションです。しかし、それを証明する要素も存在しません。

Cosmic Repeat Proverbs

#1

Created by JukeLife

Cosmic Repeat Proverbs #1

P 0 0 1 ~ P 0 0 2

OP. 魔女は科学を知っている

P 0 0 9 ~ P 0 2 1

0 1. 繰り返される悲劇

P 0 2 3 ~ P 0 3 5

0 2. 意思を秘めた賢者

P * * * ~ P * * *

0 3. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 4. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 5. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 6. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 7. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 8. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

0 9. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

1 0. 章題未設定

P * * * ~ P * * *

ED. 章題未設定

Cosmic Repeat Proverbs #1

「苜蓿苕苕！ 覬芽苕苕郭鎬闌苕苕苕！」

「t—降 s ———！ 氣—d ——— 私たち—指 z ——— g ——— い！」

青空が見える。陽射に照らされた身体は不思議と生気が漲っており、微風に吹かれた草木の揺らぐ音、そして大人たちの叫喚が飛び交っている。何の言葉なのか理解できず、しかし考える間もなく、全ての音が一瞬にして消え去る。月が映える青空には、赤い液体と赤い彗星が飛び交っている。

その景色が恋しいわけでもなく、なぜか悲しい。そう思うと青空が段々と遠く離れていき、やがて自分が闇の中へ落ちていくことに気が付く。キャンバスに描かれたような四角い青空へ手を伸ばすが状況は変わらず、一方で得体の知れない恐怖が徐々に視界を覆っていく。

元に戻って、その時に戻って——私が——この私が！

「——ア！ リクレア！ ……大丈夫かい？」 「……ママ。」

「……また、あの夢かい？」 「……うん。」

私は今日も魘されていた、何百回も、何千回も繰り返して、そこで非力な自分を感じる夢を。何の感覚も感じられず、何か意味を感じる夢を。

「ほら、朝食ができたよ。着替えて降りてきな。」 「……うん。」

階段を下りる母親を後目に布団を捲り上げ、心地良い紺色の服を体に巻き付け、胸と腰に帯革を締め付け、鏡に映った眠そうな自分の頬を叩き、その青白い髪を結ぶ。

今日も何一つ変わらない一日が始まる。——心の中では何か、刺激を求めている。それは“好奇心”と呼ばれ、それを持った少女は、昨日と何かが異なる一日を探し始める。

01. 繰り返される悲劇

「レア、その卵を入れてくれるかい？」 「はいはい。」

今日は鶏の機嫌が良いらしい。籠から取り出した2個の卵を台所の角で叩き、ママが両手で熱しているフライパンへ、ママの背後から私も、両手で同時に黄身と白身を垂らしていく。

「今日は上手く割れたねえ。」 「へへっ。」 「・・・カルボ！ 食卓で火炎を出さないの！」

「大丈夫だって、制御しているから！」 「そうやって先週も草鞋を黒焦げにしたでしょ！」

右手の人差し指から小さな火炎を出している白髪の馬鹿をルジャカルボという。どうも、兄は思春期の私よりも反抗心が強いらしい。嗚呼、また小声を言いながら火力を強くしている・・・。

「ラマ、デイル。ラマ、デイル。ラマ——」 「聞こえているよ！」 「ラマ、ティン・・・リハ

ブッド！ これやらないと火力が分からなくなるんだよ！」 「仕事場に向かう途中でやればいい

じゃない。」 「忘れるもん！」 「何で忘れるのよ！」 「何か忘れちゃうの！」

母と妹に挟まれる兄は苦し紛れに訴えるが、どうも歩き出すと全てを忘れて他事を考える癖があるらしい。・・・鶏よりも記憶力が低いんじゃないか？

「レアは何か掴めたか？ 魔法。」 「・・・ううん。」 「何なんだろうな、レアの能力は。」

「やっぱり・・・《無能》なのかな。」 「そんな、何か持っているさ。父さんが特殊な人だったから、レアもそれを受け継いだんだよ。」

私は、魔法が使えない。——基本的に魔法は家族の性質を受け継ぎ、大抵は母親の能力を、たまに父親の能力を、そして稀に《無能》として生まれてくる。

全ての呪文が記された書物から似通った呪文を唱えることで自身の能力を探し出すが、私の場合は無関係な呪文を片端から唱えても、何一つ起こらなかった。呪文には文法的な規則性があるため推測して新たな呪文を生み出すことも可能だが、その組み合わせは夜空に浮かぶ星の数よりも多いと云われている。その可用性は・・・まだまだ低い。

「そうねえ・・・もしかしたら私みたいに呪文は必要ないかもねえ。」 「うーん・・・そんな、神童じゃないんだし・・・。」

魔法は、呪文を唱えなくても使えたりする。ママ曰く、頭の中で感覚的に呪文を操作するらしいが・・・それも大抵は魔法を使い続けた熟練の能力者だけであり、それ以外は稀に、才能を持った子供が発揮するぐらいである。

とにかく、15歳の《無能》に課される仕事は存在しない。この町では能力が途絶えることを懸念して《無能》の結婚も推奨せず、代わりに巫女や学者といった頭が必要な職を勧めてくる。しかし、そんな世間の押し付けなど無視！ 兄よりも先にパンと目玉焼きを食べ終えた私は勉強ではなく冒険へ向かうのだ。もちろん、町に貢献するためにも。

「御馳走様。それじゃ、行ってくるね。」 「レア、最近やってきた《海の民》には気を付けなさ

いよ？」「最近って・・・10年以上も前の話じゃん。一度も見たことないし。」

「それが、つい先週に隣町の奴が《海の民》を見たらしい。服装が証言と一致した。」「・・・本当に、悪い人たちなの？」「・・・。」

この地に《海の民》がやってきたのは、私が生まれて間もないときの話。彼らへ妙な親近感を抱くのも、周辺地域の住人にしては珍しく古典的な魔法が使えず、その代わりに道具へ魔法を付与する民族だったらしい。彼らの起源や言語は今も不明だが、会ってからスポンジのように私たちの言語を習得して、何時しか生活を共にして、気付けば友好が深まっていた・・・とか。

「いいかい？ 厄災っていうのは人間が忘れたときに再び訪れるものだよ。彼らは人の心に入ってから欺くんのだ。・・・どんなに優れた観察力を持っても、その真核までは絶対に辿り着けない。彼らを信じていた・・・貴方たちの父親も・・・。」「・・・。」

パパは戦士だった。ルジャカルボのように体の表面を黒色に硬化させる能力を持つ無敵のパパは、危険が伴う戦士に適任だった。しかし・・・それでも《海の民》が持つ魔法には勝てなかった。放たれた一瞬の攻撃で、多くの兵隊が全滅した。今の私は・・・そんなパパが残した最後の宝物——

「逆に、私たちが《海の民》を見つければいいじゃない！」「あ、コラ！ 待ち・・・どうして父親の教訓を理解してくれないのよ。」「そういう年頃じゃない？ まあ、あの強気な性格は父さんに似たのかもね。」「・・・。」

1階の会話を気にも留めず、帯革にペンと紙を括り、肩に鞆を掛け、必要な装備を確認したらベランダから麻縄を伝い外へ脱出する。そろそろ、色褪せた指なし手袋を新調をするべきだろうか。

湿気のない淡い青空、燦々と揺らめく太陽、その地に足を下ろし、眠そうな住民を避けて住宅街を南へ駆け抜ける。突き当りで放置された街壁の穴を潜り、再び草原を同じ速度で駆け抜ける。垣根に靠れる牛や羊が挨拶をしたり、納屋の陰で一休みする庭師が手を振ったり。そして辿り着いたのは、開拓されていない小山の麓。森の境界に聳え立つ一枚岩の上には、変わらずパディマティスとマエレが待っていた。

「これで揃ったな。忘れ物はない？」 「うん。」 「大丈夫。」 「——最近はずれ続きで、運がいいな。」 「この快晴も、誰かの魔法なのかな。」 「そんな魔法は存在しないって、子供でも分かるぜ？」 「もう、パディは夢がないなあ。」 「存在したら、そいつが王だろうに。」

私は鞆から折り畳まれた紙を取り出し、それを両手で広げる。何処へ行こうか、何処を拡張しようか。そんな予定を—— 私たちが3年間を掛けて作成した地図を、皆で眺めながら考える。

「今日は南西の森で地形の概算でもするか？」 「そうね、昨日は陽が落ちて無理だったけれど、《三ツ子山》の峠まで一直線に行けば今日こそは、先の洞窟を調査できるかも。」 「そろそろ、野宿の許可を親に貰わないとなあ。これ以上は日帰りだと、本格的な作製は厳しいでしょ。」 「確かに。」 「俺の親父は門限に厳しいから・・・限界かもしれない。」 「えー。」

パディマティスは方角や水平角度、座標を感覚的に数値化する能力を持っており、彼がいなければ地図を作れないどころか、下手すれば永遠に森林を彷徨うことになる。赤髪と鋭い目付きを持つ彼は私よりも度胸があるも、大抵は調子に乗ることで痛い目を見るのは言うまでもない。

「いや、実はそれ以外にも・・・ここ最近感覚が曖昧になっているんだ。何というか・・・方角

がダブったり曲がったりするんだ。」 「そんな、魔法って衰えるの？」 「最初はそう思っていたんだが、母親も俺と同じスランプに陥っているらしい。」 「・・・つまり？」 「・・・俺が知ってるよ。何か、方角の基準が狂い始めているんだ。逆にマエレは、問題ないか？」

石を握っている彼女は特定の物質を発光させる能力を持っており、特に暗い森林や洞窟では彼女が活躍する。しかし彼女が持つ魔法と臆病な性格の相性は最悪であり、そういう状況では私たちが彼女の背中を押さなければならぬ。ちなみに、2人の魔法は常に解放されており呪文は不要だとか。

「特に異常はないけれど・・・それが本当なら行きたくないよ・・・私なんて方向音痴なんだから・・・」 「しっかりとしてくれ、そろそろ土地勘も身に付いただろうに。」 「大丈夫、先週も町で迷子になった！」 「誇らしげな顔をするな。」 「全く、何のための地図なのか・・・。」

一方で《無能》の私は、地図の書記と計算を担当している。勉強は嫌いだが数術は妙に得意らしく、それが唯一無二の能力として役に立っている。この体力や運動神経も、魔法が使えない私が獲得した冒険の賜物だと信じている。肩身が狭い《無能》だろうと——私は挫けない。

「・・・よし、南西の森と洞窟の探索でいいな？」 「OK。」 「・・・うん。」 「太陽が真上に来たら引き返す。行き帰りの途中に例の泉で休憩を挟もう。」 「・・・久しぶりに山羊の群、見るかな。」 「・・・山羊肉、食べたくなってきた。」 「た、食べ物じゃないですよ!？」

私と2人は茂みを掻き分け、斜陽が零れる薄暗い森の中へ入っていく。マエレの拳に握られた鉱石、それが照らす一枚の地図は、何れ何か役に立つのだろうか。ここに描かれて“いない”世界が私たちの足を動かし、そして、地図が完成したとき——私たちは何を思うのだろうか。



「P。——こちら、チームC。水源補給箇所に3人の民間人を確認。《エソテルボ》に住む子供と思われる。どうぞ。」『K。——こちら、仮説本部。了解した、そちらの状況と彼らの行先を定期的に報告してくれ。子供とはいえ、村人が漏れなく“能力”を持っていることを忘れるな。』

「P。——了解。・・・あ、子供たちが小鹿との接触を試みている。」『K。——もしかして前に俺が狩ったサンプルは親子か?』「P。——そうかも・・・心苦しいなあ。」『K。——まさか、動物の心を読み取る能力も存在するのか?』「P。——事前調査の報告だと心理に関する能力は未確認だから大丈夫だよ。多分。」『K。——全く、おっかないぜ。』

子供たちは呑気に水を飲んだり、容器に補充している。周辺に家屋や人工物は存在しないが・・・何を目的に訪れた? 装備からして狩猟ではなさそうだし・・・探検? 待てよ、彼らが広げている地図は・・・。

「P。——こちら、チームC。彼らは地図を広げている。武器の代わりに古典的な道具を所持しており、作製を目的に来たと予想される。どうぞ。」『K。——こちら、仮説本部。了解した、部隊は痕跡を残さないよう注意していると思うが、もしも気付いた素振りを見せたら報告を頼む。』

「P。——了解。・・・あ、小鹿に地図の角を齧られている。」『K。——平和だな。』「P。・・・この平和が続いてほしいよ。・・・どうして、僕たちは“第3調査隊”として派遣された? この後

「……」

【無知が幸せを見て、賢者が幸せを築く】ことを忘れるな。

「……」

今更、現場の俺たちに選択権はねえよ。」

「……」

確かに、これは自分が選んだ道だった。デイスプレイに投影された《フォルタグルンドウ》は一面が緑で溢れており、それは楽園を眺めているようだった。自分は潜在的に楽園を求めていたのか、それとも楽園に似して異なる《ティロディアクボ》の生活から逃げたかったのか、大木の上に座っている今の自分には、どうでもよかった。

ここを取り壊すのではなく、ここを手に入れるのではなく、ここで共生したい。しかし、人類は既に獲得したヒエラルキーを捨てられない。例えば自分が個人として《フォルタグルンドウ》に永住する道を選ぼうとも、組織としての利益を優先する集団の意思は変わらない。

そもそも、永住は不可能だと理性が訴える。ここに適応するためのワクチンは消耗品だし、ここが後に“改革”の手段として使われることを知っている。統制が徹底された自国の考えなど定かではないが、入隊して明かされる《フォルタグルンドウ》の実態と、数年前から活動が活発になりつつある科学省と軍事省——そして、目の前に広がる自然、或いは“資源”と呼べるもの。それを知った我々は、原住民との戦いが始まるだろうと容易に察する。

その現実には僕たちではなく《ティロディアクボ》の民が知るべきだろうが、数千年の月日を経て構築された社会は本当に抜目がない。だから、首脳は《ティロディアクボ》で家族が待っている我々を選んだ。それは自分が捨て駒でないことを保証するが、同時に任務の徹底を課している。

一方で『フォルタグルンドウ』の民に危機を知らせる方法もない。当然ながら言語は異なり、会話

の記録が送信される翻訳機で迂闊に話すことはできない。更に、我々は僅かながら彼らと戦争した過去がある。ここは文明が中途半端に発達しているため、我々が宇宙人であること、最も「ハビタブル惑星が2つ存在すること」を彼らは知らないが、もしも何か条件が違っていたら、今日までの猶予はなかったのだろう。・・・それが良いか悪いかは分からないが。

「^セ——こちら、チームC。彼らは南西へ向かった。繰り返す、彼らは南西へ向かった。敵対のリスクは低いと考えられる。」『^セ——こちら、仮説本部。了解した、残りのチームも指示通り。』
「^セ——こちら、チームA、了解。」『^セ——チームB、ラジャー。』

部外者、か・・・同じ人類なのに、自分は一体、何のために今を生きているのだろうか。家族のため？ 仕事のため？ 新しい楽園を築くため？ 人類の未来を守るなど大層な真似はできないが、自分の他にも世界の平和を願う者は——いるはずなのに。

・・・平和って・・・何だろう。・・・いや・・・何も知らなかったな。



何事もなく洞窟に辿り着き、私たちは中へ足を踏み入れる。暗闇に包まれた空間、不気味なほどに透き通る風、絶えなく続く段差の激しい道。その恐怖とは裏腹に好奇心が、そこに謎があれば気になってしまうのは、子供の本性だろうか。

「ここで大きな分岐点の登場か。——レア、前回の地点から前に104メートル、右に78メートル、下に26メートルだ。」「了解。えーっと・・・36度の地点で・・・ワオ、ユークリッド距離で大体132メートル！分度器はどこだあ？」「・・・もう、今日は諦めない？」「ここまで来たら両方とも調べようぜ。まだ、昼には間に合うさ。」

それにしても、この巨大な洞窟が500年も発見もされていないとは何故に？・・・今まで埋もれていた？私が生まれる前に発生した地震の話は知っているが・・・世界は何とも、不思議だ。

マエレはパディマティスの説得に渋々と従い、更に奥へ足を踏み入れる。・・・改めて考えると、風が吹くのであれば出口が存在することになる。確かに《エソテルボ》の標高は低くないが——風の流れに身を任せている今、この先には何かしらの答えが待っている。

「・・・石ってこんなに綺麗だっけ？」「・・・？」「ほら、壁を見てよ。何か、艶が・・・黒色？」「・・・本当だ。」

僅かに照らされる壁は黒曜石の如く、凍り付いたような内部が無造作に煌めいている。大気 of 砂埃を撥ね回る光は黄金色に閃いて——ここは、妙に空気が重い。気付けば微風すらも消えている。

「・・・何・・・ここは？」「・・・。」「人工物？いや——建物だ。」

穴を通り抜けた先に広がっていたのは、妙に大きい空間だった。そこには角張った巨大な柱が至る所に、両端が地面と天井に埋もれているか、もしくは「過去に聳え立って」いた。過去に門戸が存在した大きな穴、無数に散らばった透明な鉱石、道中に生える独創的なオブジェクト——それらの多くは石化しているが、非常に精密な構造が施されていたと思われる。

「待った・・・これ以上は進めない。」 「・・・急に？」 「ここへ来るまで感覚は問題なく安定していた。でも、今は狂っているというか・・・ノイズが酷いんだ。最近の症状とは別の。」

あれほど積極的だったパディマテイスの顔は、酷く青褪めていた。それは感覚というよりも、本能が何かを拒絶している。私もそうだ、目の前の光景は彩もないくせに幻想的で、それが好奇心よりも恐怖に刺激を与えている。対して、マエレは平然として・・・少しは野生の勘を持ってほしい。

「・・・ここが原因なの？ ・・・ここには・・・ここで、何があったの？」 「・・・人が住んでいた場所だろうよ。」 「いや、社会——私たちの町よりも遥かに高度な社会があった。・・・ここは、その残骸だ。」 「・・・。」

道と家、その内外に存在した何かは、今の《エソテルボ》と基本が同じだった。巨大な家と広大な道は、民族や資源の豊かさ、そして馬車の普及率を物語っている。しかし概要が掴めても、この街が廃れた年代や理由は分からない。私たちが立っている場所には・・・想像以上の歴史が眠っている。

「でも、そんなに高度な文明が滅んだ理由は？ 魔法が使える俺たちよりも進んでいるなら、永遠に繁栄できたはずだぜ？」 「・・・。」 「捨てたんじゃない？ ほら、火事とか災害で使い物にならなくなったからよ。」 「・・・だったら、そいつらは今、どこに居るんだ？」 「・・・。」

「とりあえず、今日はここまでにして帰ろう。」 「・・・そろそろ昼だしな。」

今は答えまで辿り着けそうにはない。少なくとも大人の手が必要だった。だからこそ——いつの日か、この遺跡に秘められた歴史を自分で解明したい。

・・・これだ。これが、学者たちの心に宿る“好奇心”の正体だった。そこに入り混じる“恐怖”

は無知が原因だった。彼らは無知という恐怖を克服するため、それが何かの役に立つから勉強をしているのだ。・・・私が嫌っていた勉強は、その本質を知らないだけだった。

「今日の出来事、町長に報告するの？」 「・・・報告したら、間違ひなく俺たちは入れなくなる

だろうな。」 「そう、もう少しだけ調べて・・・フヘヘ。」 「あッ、レアの無謀な計画を立てる

顔だ。」 「ち、違う。あの遺跡が凄すぎて・・・何か、大きい気がするの。」 「お前の興奮する

気持ち、分かるぜ。俺も股間が大きくなッ」 「もう、そういう下品な考えだからパディは結婚相手

の候補がい」 「こ、これは自然的な反応だ、それぐらいに俺の感覚が何かを—— ア、チカチカッ

「・・・!？」 「何の・・・音だ？」

元の入口に向かい始めて間もないとき、謎の音が空洞に響き渡った。それは振動と一緒に、何か大きな衝撃音だった。地震・・・ならば一刻も早く脱出しなければ。

「急ごう。」 「落ち着け——地震にしては振動が小さすぎないか？」 「・・・外の音だった、

今のは。」 「何が起きた？ ここまで聞こえる轟音なんて・・・」 《海の民》だ。奴らの魔法

は・・・大きな音が出ると。」 「!!」

今朝に聞いた《海の民》が、本当に攻めてきた？ しかし偶然と解釈するには無理がある。あまりに突拍子のない事実——思考が遅延する。どこを攻撃された？ ここの攻撃される？ 何時間前

に攻撃が始まった？・・・家族は、無事？

衝動に駆られた足はマエレを抜き、寸前の暗闇を追うように走り続け、気付けば遠くに佇む光を
目指していた。外へ出たところで世界の眩しさに、正気が戻る。道具と地図が入った鞆を砂利に投げ

捨て、ひたすらに《三ツ子山》へ向かう。今から《エソテルボ》まで戻るには時間が掛かる。せめて今の状況だけでも——何が起きたのかを確認したい。

開けた峠まで辿り着いた刹那、先程よりも小さい轟音が耳に響く。しかし、それは同時に“目撃”した。青空にまで昇る黒い煙と——斑に広がった無数の炎を——

「・・・嗚呼。・・・嘘だ、・・・嘘だ。」

《エソテルボ》の郊外と周辺は、赤色に染まっていた。具体的な様子は定かではないが、炎と共に複数の巨大な杖が地上に突き刺さった現実味のない光景は、故郷を失った涙すらも忘れるほどだった。あれは魔法で作られた？ 地面から生えた？ いや——空から降ってきた？

その視界に、デジャヴを感じた。前にも・・・いや、何百回も、何千回も感じた情景を。

「赤い・・・彗星・・・。」

TIP・・・《フォルタグルンドウ》に住む人々は、今の人類よりも生命力が遥かに高いです。僅かな酸素でも効率的に交換が行え、怪我や病気の治りが速く、また細菌やウイルスに対する高い免疫力を持ちます。何も考えられないダチヨウが思考停止するぐらいに強いです。厳しい自然環境を乗り越えた人類が獲得した当然の能力だと思うかもしれませんが、これには奥深い理由と歴史があり、その真相は後々に判明します。レアと同じように洞窟の先で散乱した人工物の残骸を目撃したとき、現代に生きる我々は何かを察したはずです。

「なあ、オクデイブ。お前の机に置かれた旧型の《仮想分子検証装置》は何色の文字が表示されるか覚えているか？」 「ハハッ、僕の記憶力を舐めないほうがいいぞ？ 空色だね。」 「ふーん、

だったら『空色』が何か説明できるか？」 「空色？ そりゃ、惑星に降り注ぐ光子が大気中で散乱

するときに波長の短い寒色が—— 「それは、自信を持って『空色』と言えるか？」 「うーん、

見たことないからなあ…… 「そう！ 不思議に思わないか？ 俺たちが言語を形成する過程で空

の色を『空色』と名付けたのは紛れもない事実だ。しかし、『ティロディアクボ』へ完全に定住した

《新人類》は『空色』を何と説明する？」 「……確かに。」 「最も《科学者》や《歴史学者》は

根拠まで説明できるが、一般人は目の色だとか光の色だとか『主観的な日常』で例えてしまう。」

「つまり？」

「言語は長期的に情報を保存する媒体として欠陥が多すぎると思うんだ。写真や音

声とは別の『一次的な知識の参考』が必要になる言語……少なくとも自然言語で歴史や文化を記述

しても、物理的な『ノイズ』が増えるだけ。空色の『空』だって、恒星が……アレ、何だっけ？」

「『太陽』だよ。」 「おう、それだ。そうやって階層的に——

生まれてから一度も青空を見たことのない《新人類》には、太陽という存在が物理的にも心理的にも遠く感じられる。青空と同様に『フォルタグルンドウ』では身近な概念だったらしく、それが方角を確認する手段、それが食糧を生産する要素、それが多様な生命にエネルギーを——とにかく、無数の恩恵を得られる。少なくとも、僕たちは太陽の本質的な価値や活用を知っている。

これは【存在が失われた刹那、直観はその価値を初めて理解する】という諺に通じる。が……価値が理解されないまま、徐々に存在が失われるものを知った今……それは諺も同じだと悟った。

02. 意思を秘めた賢者

「スケプトの考えは分かるけれどね、この『流動的』な宇宙に『絶対的』な情報を残すなんて、無理な話だと思わない？ 無機物に刻むよりも、環境の遷移に対応できる『何か』が常に存在しないといけないのよ。」 「・・・ほう。」

《ペーパー・モニター》の設計図を見詰めるストウシステイが、ふと話題に加わった。持論を話し終えたスケプトはインカムを触りながら、再び思考を巡らせる。

「・・・つまり、昔話や伝説を語り継ぐ人類のような『機構』が重要ってことか？」 「フフウフ、そういうこと。」 「《保存者》が生命を作る必要があるとは、随分と面倒な使命・・・」 「俺たちは『兵器開発者』だぞ。生命を脅かす奴が生命を案じるなど、精神が持たない。」 「・・・。」

サイロの一言に、皆が自分を見詰め直した。鋼鉄の部屋と無数の電子機器に囲まれた自分たちは、確かに生命を蔑ろにする元凶かもしれない。しかし――

「自分は【武器が自他の運命を平等に扱う】ことを信じているよ。兵器は生命を破壊する道具だけれど・・・それは生命が自身を守る強力な手段でもある。だから、僕たちは《フォルタグルンドウ》の再移住に向けて、『危険な動物を駆逐する兵器』を開発している。だろ？」 「・・・。」

「今日の《ティロディアクボ》に住む《新人類》が、世界の理とされた『弱肉強食』を忘れるのは仕方ないさ。」 「・・・オクティブの言う通りかもな。結局、人類は欲求や本能から逃れられないままかもな。」 「・・・こんな話題だっけ。」

謎の結論で話題に幕が下り、各々が元の作業に復帰する。が・・・現在は《朝の時間》なので、残業を嫌うスケプトはソファで中途半端な瞑想をしている。彼が担当する『兵器が及ぼす影響の検証と評価』は誰よりも早く片付けられるため、何も文句はないが・・・テーブルに空のコーヒークップやら《情報操作端末機器》やら私物を置いたままにする癖は直りそうにない。

自分のグラスと一緒にスケプトのカップを持ち去ったサイロは、ここ一番の効率家であり何かと口が冷たい。しかし紺色のポニーテールは面倒屋の証拠であり割と皆に気を使うなど、よく分からない性格を持った『回路の執筆者』である。

自分とストウシステイは同じ『兵器の設計者』に見えるかもしれないが、実際は自分が小型兵器を、彼女が大型兵器を得意としている。こんな自分も大学を卒業した『エリート』に分類されるわけだが、特に紫色の瞳と髪のストゥは科学応用部門の中で最も頭脳成績が良く――

「あら、隣の班のフィードバックが届いている。」 「あー、そういえば向こうの軍事コロニーが完成したんだっけ、3日前ぐらいに。」 「もう使われたのか？ 司令部もセツカチだな。」

「でも、どうやら《天の杖》は半分ぐらいが不発だったらしいよ。」 「やっぱりな！ 多重層のコーティングもしないで低軌道から投下するなんて無謀な話だ！」 「消耗品だからと資源をケチった末路だな。」 「ハハハ・・・僕たちの兵器は完璧だと祈るよ・・・。」

これまでの兵器開発1課が考案した兵器は無数に存在するが、今回の《移住計画》では《新人類》が再び《フォルタグルンドウ》での永続的な生活を営めるよう、環境構築の一つとして安全の確保に適した兵器が使用される。僕たちが2年前に開発した《自由飛行型戦闘機・FFF》と《超磁力式自動小銃・MRG》も計画の第2部で使われる旨が通達されたので、敵は随分と手強い様子である。

「しかし、こんな強力な武器を開発したのはいいが・・・本当に必要なのか？」 「ハハッ、現地に肉食動物がいるのは承知だろう？ まだまだ《フォルタグルンドウ》は謎に包まれている、そういう場合こそ【備えあれば憂いなし】だと思うよ。」 「動物ねえ・・・あんなに可愛い家畜が、本当に人を襲うのかい？ 資料で見た奴らは最早『モンスター』だったぞ。」 「環境が違うから、エンティティーも特性が変わるのよ。安地も安定もない世界では、絶対的な力を持った生命だけが生き残り続けるわけ。」 「はぁ・・・自然っていうのは恐ろしいな。」

実際は単純な話ではないらしく、《移住計画》の概要を聞く限りでは動物や植物に寄生する細菌やウイルスも侮れない敵であり、実際に14年前の第1調査隊が動物の攻撃に遭遇したり想定外のウイルスに感染するなど、まだまだ課題が残っている。《ティロディアクボ》の千年も続く大雨や暴風もそうだが、自然の力は本当に恐ろしい。

「スケプト、そろそろ08時だぞ。コーヒーも淹れてやったから、さっさと腰を上げて《OS》の新鮮なタスクをやりな。」 「あと5分・・・」 「膝に掛けてやろうか？」 「はいはい！ やりますから！」

そんな過酷な《ティロディアクボ》は、そもそも人類が居住する惑星ではなかった。千年前までは

本来の・・・歴史では《前人類》と呼ばれるが、僕たちの祖先は《フォルタグルンドゥ》に住んでいた。ことと変わらない生活、それも太陽と青空の下で暮らしていた《前人類》は、制御不能な災害を被ったことで《フォルタグルンドゥ》という故郷を捨て、それまで鉱石資源を採掘していた反対側の惑星《ティロディアクボ》まで避難した経緯を持つ。

「たった今、《FFF》の追加プログラムの最終版が完成したぞ。検証も問題ない。」「・・・は？ あれ、完成版として提出しちゃったよ!？」「はあ!？ パッケージに何のラベルも貼ってなかっただろ!？」

「この前まで“無印が完成品な”と言ったじゃない!」 「それは検証用のデータの話で——」 「へい、2人とも落ち着け・・・とりあえず行動が先だ。」

ここへ避難したのは約500名。人類の再始動を掲げて“5人の賢者”が開拓の先導を行い、段々と《ティロディアクボ》に地下都市という蟻の巣が繁栄した。生活循環が安定した最近に第1調査隊が宇宙船で《フォルタグルンドゥ》へ派遣されるが、故郷を生き延びた《前人類》の存在は確認されなかった。対して人体への影響が懸念されていた汚染は治まっており、第2調査隊の帰還後に《フォルタグルンドゥ》が居住可能であると断定された。

「《FFF》とか2日前に量産開始の通告が来たのよ!？」 「今から仕様の変更なんて許されるのか?」 「なあ、何か俺が悪いみたいな空気になってねえか!？ 基幹のシステムじゃなければ、プログラムは外部から上書き・・・そもそも《FFF》の設計者はストゥだろ?」 「そう、そこに改竄防止用の《オーバー・セキュリティ》まで組み込んで・・・」 「そうだった! あれ100機ぐらい作るんだろ!？」 「損傷時の負担軽減に関するプログラムがないのは、マズいぞ。」

特に千年前の災害に関する歴史は凡そが消失しているので何も言えないが、これだけ発達した科学を持つ人類が太刀打ちできなかった災害とは、一体何だったのか？ 一説には原子力を用いた兵器で大規模な戦争が勃発した過去を政府が隠蔽している話を云われたりするが、何にせよ明白な根拠が存在せず、とにかく《フォルタグルンドウ》の情報は今日でも殆どが公開されていない。

「なあ、本番で運用しないと正確なプログラムが書けない態で、今回は見送らないか？」 「それ俺の前で言うか？」 「正直にミスを伝えましょうよ。多少の評価は下がるけれど・・・フフッフ、この際に《オーバー・セキュリティ》の実態——見たくない？」 「・・・！ 整合性の点検も必要だと言えば現地で」 「待て待て、待て。何を目的に！？」 「知的好奇心。」 「ハァ！？」

陰謀論は良からぬ考えだが、時には娯楽として、時には本能として考える節がある。例えば調査隊も僕たちと同様に情報の一切を口外してはならないが、注目するべき点は調査隊の平均年齢である。科学応用部門は若者から老人まで幅広い年齢層より構成されているが、一方で調査隊だけは家族持ちのオッサンばかりである。それなりのリスクを含む役職に——扶養者を採用するものか？

「大丈夫、見るだけよ。」 「ストウが言う、大丈夫は信用できねえんだよ。」 「分かった、多数決でいい。今は2体1、オクディブの意見次第で現地に足を運ぶか決めるんだ。」 「サイロ、お前そんなキャラだっけ！？ ・・・分かったよ。・・・オクディブ、お前はどうか？」

これも社会的な方針だと言われてしまえば文句は出ないが、社会の因果や相関が複雑すぎる現在の統制を、5人の賢者”は把握しているのだろうか？ 何が無造作で、何が必然的か。時々・・・自分という役割が生み出す意義や本質が、分からなくなる。兵器の開発が何を——

「オクデイブ?ヘイ!」 「! ?な、何だ?」 「.考え事か?」

「.いや、少しだけ危険な妄想をしていて. 「良い考えだと思うか?」 「.悪くはないと.思う?」 「ほら、これで3対1よ。」 「嗚呼.お前は、まだ若いんだな。」

「うん.え、何の話?」 「いいさ、若者の心には負けたよ。」 「スケプト含めて全員20代だろ。」 「現地で《オーバー・セキュリティ》の仕組みを見学するぞ。」

「.は?」



1課の研究室を施錠した後、僕たちは必要な機材を持ち製作所へ向かった。確かに追加パッケージを正常にインストールする必要があるが、その為に全員が現場へ出向くのは不自然な気もするが。

科学応用部門の拠点は分散しており、特に地上での試験や運用が強いられる製作所と電子情報の徹底的な保護が強いられる研究所は場所も高度も遠く離れている。

「向こうも両者の部長に黙ってくれるのは有り難い話だけれどさ.その『工房3F17』って何処だよ!? 第〇製作所とか単純な名前だったはずだぞ! ?」 「自分が配属したときから、そんな名称だったよ。」 「スケプトは理論工学が担当だからな.《移住計画》の経過に伴って担当

が細分化されたんだよ。」 「そうそう、世界は広いの。」

いつものように退屈な灰色の廊下で白衣を纏った関係者と擦れ違いながら、複雑な迷路を潜り抜け

た先で少しは彩がある広間の《通行搬送帯道》に一時だけ足を休ませ、10分後に第3ターミナルへ到着すれば色彩の豊かな草原で寛ぐ人々、または行き交う人々を通り抜けて《高速列車》まで歩み続ける。あの、螺旋のエレベーションが有名な《線》である。

ここ最近「磁場の逆転」が発生しているせいか地上付近の都市や施設が閉鎖される日も多く、故に深層部の名所である楽園と植物の憩いを求めて観光人が増加している。既に《空間恐怖症》という単語は死語になりつつあるが、それでも人間が無機質な空間に留まるのは難しいようだ。

「こんな《科学者》ばかりの巢窟よりも、第2ターミナルにある牧場のほうが広くて休めるだろうに。」「そう考える奴が大量にいるから、第3ターミナルなら空いていると思う奴も現れるんだよ。集団心理ってやつだ。」「ハハハ、何処も【人は人を見て動く】からね。」

「・・・もしかして今のは諺ね？」「お、正解。・・・って、まさか。」「クソ、またストウに先を越された。」「はあ、まだ下らない賭け事は続いていたのか。」「いいいいいよ。自分も、何だか諺に思考が縛られているような気がして・・・無意識だから、指摘して。」

「諺か・・・そこまでとは、宗教の道具みたいだな。」「まさか、今の宗教は《奇想の仮想》に過ぎないだろ？ 古典的な宗教は例外なく消えている。」「信仰やら崇拜やらがなくとも集団的な暗示は宗教の一つだ。ミームは面白いが、恐ろしいぞ。」「いいじゃない、自由だし。」

「・・・まあ、個人の勝手かもな。」

サイロが指摘するように、自分も諺に暗示を受けているのかもしれない。それは先代が大切だと判断して圧縮した知恵であろうと、言葉という時間や空間を超える存在は、同時に「古く悪い」考えを

伝搬しているかもしれない。《フォルタグルンドウ》へ辿り着いた《新人類》は“その遺伝”を断ち切るために言語を再構築したというのに、果たして効果はあったのか・・・。

人間は根拠や意義を持ちたがる。それは文化や学問として世界を良い方向へ運ぶが、それは同時に存在しない“真実”やら“神様”やらを創造する、いや、実際は分らない。現に、僕たちは進化の過程を経て生存した“だけ”なのか、初めから意図的に存在している“だけ”なのか、今日まで証明されていない。しかし・・・皮肉にも、存在しない“それら”は《フラクタル》のように自分で自分の根拠として仮定している。時間や空間を辿るのだから、証明が・・・意味が――

「ねえ、スケプト。朝方で理想の言語について熱弁してもらったけれど、今の言語が作られたときは――何を・・・いや、昔の言語から・・・いや。ごめん、何でもないや。」「お、おう？」

そうだ、言語も同様に長い年月を経て遷移するものであり、そこに極端な歴史を保持できるわけではない。最も、千年前の歴史を知ったところで得られるものはない。

「・・・何だよ、気になるじゃねえか。」「ごめんよ、途中で矛盾に気付いたからさ。」「何

だか、今日のオクディブは落ち着かないわね。」「自分も何だか。」「・・・。」

作為性という莫大な概念に不安を抱いていた、それだけだった。こうして、無鉄砲に根拠や意義を探し求めてしまう自分も・・・まだまだ未熟なのだろう。



「それにしても、1課の人間が製造現場に来るとは珍しいな。」 「ハハハ・・・完璧を目指しているつもりですが、僕たちも人間ですから。別に、どれだけ現物を見ても——浪漫が感じられるので、良いですよ。」 「そりゃぁ嬉しいね、俺たちも誇りに思える。」

サイロとストウが脚立の上でシステムの更新を行い、その手前で自分は工房3F17の所長と雑談する一方、スケプトは《FFF》の周囲を歩き回りながら目を開けたり閉じたりしている。違法に外部の技術を盗み取る様子が勘付かれないよう、自分は所長を引き留める役目を担っているわけだが、こうして傍観すると・・・やはり、全員が変人だと思ひ改める。

「それにしても、1機ずつ更新するのは大変そうだな。」 「仕方ないですよ、どっかの誰かさんがテキトーなメモで 「聞こえているぞ。」 「まあまあ。別に、手順書とデータさえ渡してくれても黙って・・・」 「特殊な機体なのでシステムが複雑なんですよ。」 「ああ、そうだな・・・俺も最初は驚いたよ。こんな兵器・・・いや、移動手段は初めて見た。」

確かに、飛行機といえば翼と出力装置が付いた機体を想像するが——この、パラボラアンテナを組み合わせたような巨大な円盤は桁違いの性能を秘めている。複雑な繋ぎ目をした鋼色の表面は全身が空気を斬る翼であり、その下部にはタービンも噴射機構もない3個の不思議なスラスタ、そして自分が設計した《MRG》が露出している。

《FFF》は、学生時代のストウが1課に配属される前から設計していたものだ。フリスビーを基にした飛行機は既に考案されていたが、彼女は従来の翼や出力装置を取っ払ったうえにスラスタの技術を独学で開発してしまった。宇宙に存在する4つの力を上手く弄ることで自由に浮遊させられる

というが、彼女の論文を読んだところで誰も理解できず、発表会で試作品を飛ばしたら速攻で軍事省に攫われたという伝説が残っている。

「終わったぞ。次、行くぞ。」 「オクディブ、あと何機ぐらいよ？」 「えーっと・・・23機

だね。」 「そんなに！？ やったあ！」 「ええっ・・・社畜なのか彼Z 「オッサン、解除して

くれ。」 「はいはい・・・。」

どうやら、まだ《オーバー・セキュリティ》を納得できるまで解読できていないらしい・・・

嗚呼、スケプトが直立したまま死んでいる。全く・・・もう。

「おーい、行くぞ。」 「――。」 「・・・こりゃ、駄目だな。」 「オクディブさんも大変

ですなあ・・・。」 「ハハハ・・・慣れっこですよ。」

なぜ、ストウは18歳から働いているのか。なぜ、1課は若者ばかりなのか。なぜ、兵器開発は1課だけなのか。なぜ、1課が軍事省ではなく科学省の下に配属しているのか。その答えは彼女が軍という存在を嫌っていたから。――そもそも《FF》は戦闘用ではなく、純粹に飛行機として設計されていた。しかし圧倒的な技術を目の当たりにした軍事省は、彼女と複雑な取引を交わした。

人員と環境を用意する代わりに、それは兵器として開発する。そこに拒否権など存在しない。決意したストウはスケプトの長考する癖を買い、サイロの完璧な腕を買い、自分の・・・。自分は、なぜ選ばれたのだろうか？ 選抜のとき、隣に立っていた幼馴染のパラモは僕より成績も志向も優れていた。何より、自分は「理由もなく銃火器を作るため」に軍事省へ就職した。面接と同じように武器の浪漫を語ったはずなのに、武器を嫌う彼女は何故、武器が好きな自分を引き入れた？

「次だ次だ。」 「・・・面倒なら私に《オーバー・セキュリティ》の鍵を渡してもいいんですよ？」 「そうしたいところだけれどねえ、不正な改竄を防止するために責任者が首から下げているわけで・・・ 「見張っていれば大丈夫ですって。」 「いやほら、鍵がスキャンングされる可能性もリスクに含まれるから——」 「・・・。」 「き、君を疑っているわけじゃないよ。」

ストゥは兵器を好む人間ではないが・・・意味もなく危険な道を歩く程度には、厄介な性格をしている。どうして・・・自分は、彼女と同じように「兵器を嫌いにならなかった」のだろうか？



パッケージの更新と《オーバー・セキュリティ》の解説は無事に終わり、4人は第1ターミナルの店舗で昼食を摂っている。しかし3人の白熱した会議は止まらず、食い荒らした皿を囲み1時間が経過した。・・・眠い。

「——そう、公開鍵とパッケージの狼藉が復号鍵として使用されているの。処理を通過したプログラムとコンパイラーが同じRAMの中でシステムに対応したプログラムを交換するから、狼藉の値が不要なコンパイラーを送信される前に暗号化されていない改竄したパッケージをRAMに直接ぶち込めなければ、不正はできないわけ。」 「起動回数も鍵に使われているなら絶対に不可能じゃないか。お手上げッ！ これ以上の質問なしッ！」

相変わらず何を言っているのか、3割も理解できない。・・・しかし、ここまで《オーバー・セ

キユリティー》の解説に執着しているのは脆弱性を突きたいわけではなく、正式な《科学者》にさえ公開されていない技術や知識が多く潜むからである。人は何かを隠されると、それを探してしまう。

「よくまあ、本体のソースもログも頼らずに仕組みを解明できたよね・・・。」 「フフン、あれだけ時間があれば即席でテスト用のパッケージが試し放題だぞ。」 「なるほど・・・。」

《ティロディアアクボ》の歴史や社会、学問にも、少なからず秘密はある。明示的に情報が隠されることもあれば、存在すら気付くことのない情報も存在する。・・・それは、悪いことではない。不正や悪用を防ぐためだとか、健全な思考を育てるためだとか、都合に対する意図が――

『アー。聞こえるか?』 「!?」 『ギョーおう、ばつちり翻訳されているぞ。』 『ギョーアホ

か、俺たちが知らない言語だぞ。』 『向こうに行けば、使い道も分かるだろ。』 『ギョー。』

突如、謎の会話がインカムを通じて右耳に垂れ流される。何処かのグループに混線したか、設定を間違えているようだ。話を聞く限りはリアルタイムの・・・翻訳機・・・?

「どうした?」 「・・・あ、大丈夫。インカムが混線してさ。」 「そういえば、ここは軍人が

ウヨウヨいる場所だったな。」 「一応だが、盗聴は違法だぞ?」 「ま、まさか軍事省の機密情報を探ろうとか思っていないじゃない!」 「図星じゃねえか。」 「・・・。」

物事の「意義」は幻想だろうと、そこに「意図」は必ず存在する。今の会話が演技でなければ、謎の言語を翻訳する機械は存在する。しかし《ティロディアアクボ》に存在するのは、一つの人工言語と幾つかのコンピューター言語のみ。・・・謎の言語とは? ・・・何のために、何を翻訳する?

TIP・・・本作で描かれる文章や単位は、現地で使われている言語を基に日本語へ翻訳したものです。《フォルタグルンドウ》に存在するパンは現代の私たちが知るパンとは異なりますし、対して科学が発達している《ティロディアクボ》では未知の事象を現代の文明が理解できるよう造語で表記してあります。魔法の呪文は前世の人類で途絶えた言語、そして今世の人類が蘇らせた言語であり、それと似通った過程と持つ古風なヘブライ語を代用しています。言語とは遷移する歴史が圧縮された情報の塊であり、それを扱うのは本来、とても難しいことなのです。

Cosmic Repeat Proverbs
#1

発行：2023.09.10
版番：0.1 (早期公開)
著者：JukeLife

如何なる表現を含む二次創作を許可